

# 『ベルリン物語集』と国家公安省

酒 井 府

## (IX)

引き続き 75 年 12 月の記録文書になり、最初は上記と同じ部門への Holm 少尉の 12 月 11 日付けの短い覚え書きで、12 月 10 日のベルリン作家同盟役員会議の情報である。先ず Plenzdorf が党の文化政策に関して挑発的な発言をし、取り分け文化政策の実践に於いて第八回党大会の諸決議は撤回された事、その文化政策の行き戻りは彼自身に関する事件で証明できると発言した事。Jurek Becker はそれに同意し、その際に非常に個人的なやり方で文化政策問題に於ける「独断的」姿勢の政治局員 Paul Verner を攻撃した事。更に二人は他の役員達の討議にも係わらず、その発言を撤回しなかったとある。

次に同じ部門への大尉 Pönig の 12 月 15 日付け文書が続く。会合報告とのタイトルで、IM 《Martin》と 12 日 20 時より 21 時 15 分に会っている。

前の彼の会合報告と同様、IM の個人的様子に触れてから、ベルリン作家同盟党基礎組織の選挙報告集会最中に於ける作戦上の対象作家達の態度に就いての報告が書かれている。その報告は別の IM 《Hermann》の報告と一致していると述べてから、IM が Uwe Kant と例のアンソロジーに就いて話し合い、アンソロジーの政治的底意と敵対的性格を後者に説明し、後者も既にそう考えたと言ったと述べている。彼の考えの原因は取り分け個々の寄稿の内容を知った事にあり、彼は Heym の寄稿を決定的に敵対的と見なし、その公表に尽力する意図は全くないと IM に発言した。此の状況を IM は、その寄稿を取り下げ、その企画同様その組織から引き下がる約束を Uwe Kant から取るのに利用した。

IM は同じ様な姿勢を取る様に他の作家達に働きかける事をも要請し、Uwe

Kant は了解し、その目的の為に次の作家達の集まり迄沈黙し、その集まりで他の作家達を前にして Heym の寄稿の敵対性を指摘し、後者の寄稿をアンソロジーから外すか彼の寄稿を取り下げるかを要請すると提案した。彼は最初の集まりでの Kunert の発言を考慮して、この姿勢が一連の作家達に効果を発するとの見解である。IM は上述の行動以前に Kant と協議する事で彼と一致し、それには国家公安省と党の助力の必要を説いた。

Rolf Schneider から此のアンソロジーへの参加を告げられた事を述べてから、IM は彼にその参加を思い止まるように暗示し、彼はその企画から引き下がる事を約束出来ると語り、企画の正当性に疑念を抱き、Kunert と論じ合っている。Kant と Schneider はこの企画では参加出来ぬのであり、Schneider は更に IM に対し、彼と Kunert の脱退によってその企画が崩壊するであろうと発言した。

最後に此の記録文書の作成者 Pönig 大尉は任務として、「IM は Kant, Schneider と、アンソロジー企画の状況の変更に関して恒常的かつ時期を得て情報を伝え得る様に更に接触を保つ。」(33) と書いている。

上述の同じ部門への Pönig 大尉の記録文書は更に続き、やはり 12 月 22 日付けの公安担当 IM 《Martin》を情報源とする会合報告であるが、会合の日時は 11 月 27 日 8 時 45 分～9 時 50 分となっている。IM は打ち解けた様子で、会合の目的は作戦上の重点『自費出版』に設定されたとあり、IM は Schlesinger、Plenzdorf 及び Stade の Wolfgang Kohlhasse 宛の書簡を知っているかと尋ねられ、彼は緊急な医療上の処方故に作家同盟に於ける最近の協議に参加出来なかったと説明したと書かれている。

この様な理由から彼は、内容は知らないが Kohlhasse が党指導部に上述の書簡に就いて通知した事のみ知っており、そこで Pönig より内容に就いて通知され、それにも係わらずなお自ら公式に調べる様に要請された事、説明された実状に基づき彼は直ちに上述の三人の計画の敵対的内容を認識した事が述べられている。「彼はその上に先ず、彼に作家達のその様な敵対的企画に就いて即座に通知しない事は党指導部同様作家同盟指導部の汚らしさであると発言した。」

(34)とあり、更に彼には両指導部のその様な姿勢が納得出来ない事、Pönig の助言に応じて調査し、そこで同盟が何をしようとしているのか質問するであろうと発言した。

彼の第二の反応は、彼が信用に値し、彼は無条件で『アンソロジー』の計画を粉碎すべく彼の全存在を賭けると説明した事であった。一方 Pönig は『アンソロジー』の計画をそれ自身の崩壊によって挫折させるのが重要であると説明した。

IM《Martin》はそこでこの問題に於ける全面的な支持と Uwe Kant がこの企画から離れる事を保証すると発言し、何がこの人物をこの見え透いた企画へ参加させたのか判らないし、彼の見解によれば Uwe Kant は何か考えているに違いないと発言している。また彼は Uwe Kant へ厳しい姿勢を取ると断言する。

《Martin》は更に「Uwe Kant との対話に当たって徹底的に以下の事を明らかにする様に要請されたのである。——誰が彼をアンソロジーへの協力のため獲得したのか。——如何にどの様な条件で彼はアンソロジー協力のため獲得されたのか。——この計画への参加の彼の動機は何なのか。——アンソロジー参加者達の間の相違に就いて何を彼は知っているのか。——この計画の着想者としての Heym の役割に就いて何が知られているのか?」(35)と報告書にあり、Stasi と IM 間の作戦の徹底ぶりが伺われる。

また《Martin》は Uwe Kant にアンソロジーからの撤退と三人の組織者から距離を置く事を承服させた後、後者がそれへ唆されるなら、先ず後者と公的な断絶をするように要請されたとあり、更に《Martin》は対話の際に、アンソロジー参加者達の次の会合に当たって彼の先例によってなお別の参加者達をこの計画から距離を置くよう唆すべく、プロジェクトに反対する様に Uwe Kant を利用出来るか、試みるであろうと報告されている。《Martin》は更に Rolf Schneider との対話と彼への工作の成功の見通しを断言し、次週に予定している Uwe Kant との対話の結果に就いて即座に報告する事、その結果を Schneider との対話の基礎にする事も断言した。

やはり同じ部門に Wild 少佐より送られた書簡は 12 月 30 日付けであり、『作戦上の情報 Nr. 13/76』とのタイトルに、『アンソロジー『ベルリン物語集』への作家 de Bruyn の参加』と言うサブタイトルが付いている。

IM《Roman》との 12 月 19 日の会合の際に得たアンソロジーへの de Bruyn の協力姿勢に就いての報告が書かれている。de Bruyn は Plenzdorf の USA への研究旅行直前の 1974 年 10 月または 11 月に後者より協力を要請され、ベルリン作家同盟幹部及び何人かの出版責任者との意見の調整によって以下の様な種類の実験をする意図があると説明されたのである。彼は即座にベルリン作家同盟議長 Günter Görlich にも DDR 作家同盟会長 Hermann Kant にも此の企画の公認に就いて問い合わせ、両者ともそれに就いて知悉し、疑念を差し挟まなかったとある。そこで彼は同意し、未発表の物語『不法監禁』の原稿を Klaus Schlesinger に提出した。

de Bruyn はその物語を「実際に起こった楽しい或る物語」と評価しており、それは名前と場所のみを変えた逸話であり、数年前に彼の隣人の女性と人民警察官の間に起こった出来事で、彼は感激し一気に書き上げたが発表する考えはなかった。de Bruyn の叙述によればその頃は寄稿も少なく、幾つかの寄稿は未熟であったので、アンソロジーは初期の段階であり、彼のアンガージュマンは彼自身の原稿を用立てる事、他の作家達の寄稿を読み、それに就いて彼の意見を表明する事であった。

1975 年 11 月末か 12 月初め、彼は彼の作品の初版權を所有する Halle の中部ドイツ出版責任者よりアンソロジーへの彼の協力を撤回する様にとの影響を受けた。そこから彼は一方の文化省と作家同盟幹部と他方のアンソロジーの作家達との間に誤解があると推定したと言う。アンソロジーの協力者達に作家同盟損害の陰口が言われるが、彼は「その非難を理解しない。同盟のかなりの役員達は最初からアンソロジーの作家達の計画に就いて全てのその帰結共々知らされ、その企画を『実験』として受け入れたからである。」(36) 彼はその寄稿を未だ引き上げず、それ故に「誤解」を除く為に先ず幾人かの幹部会員と協議するつもりであり、アンソロジーの協力者の一人が同盟や DDR を傷つける

つもりがあるとは想像出来ない。協議の結果、逆の事を確信したら、彼はアンソロジーより撤退し、その寄稿を引き上げると最後に書かれている。

同じ Wild 少佐の 12 月 30 日付けの書簡はやはり同じ部門へ宛てられており、やはり『作戦上の情報 Nr./76』のタイトルがあり、サブタイトルは『作家グループ Plenzdorf, Schlesinger, Stade』となっている。IM 《Andrè》が 12 月 22 日に報告している。

先ずアンソロジープロジェクト『ベルリン物語集』に就いての報告であり、Schlesinger と Stade が依然としてプロジェクトに携わり、12 月末に編集済みにしたかったので、完成した物語を用立てられる更なる作家達を見出そうと目下は努力している事、仕事は彼等の肩にかかっているので、Plenzdorf と Stefan Heym がその様に言及しようとも寄稿送付期限の延長に決して応じるつもりはない事が報告されている。後者二人は多くの今まで提出された寄稿は文学的に未熟でアンソロジーには採用出来ないし、少なくとも二十五人の作家達が参加し、少なくともその三分の二が特色あると評価される時のみ、予定されている物語集は期待通り効果を発するのであり、それは 12 月末迄達成出来ないと考えている。

Schlesinger と Stade は今までの参加者の間で彼等が追いのけられ様としており、彼等がほぼ一年間多くの時間とアンガージュマンをプロジェクトに投資した後、他の人達が企画の先頭に据えられようとしており、それは 9 月の作家達の協議で確定されたとの印象を抱いている。そして Stade は de Bruyn と Klingler の名を挙げている。IM の作家達間の齟齬への期待が伺える場面である。Stade と Schlesinger は彼等の同僚の何人かが企画から逃げようとしているのに苦い思いをし、党がこのアンソロジーを「作家達による出版」への第一歩と嗅ぎつけたと見ており、今や此の出版に係わる様々な方面にイデオロギー上の「演出」が加えられ、何人かは変節したと語り、今や「火全体」がやがて彼等に向かうと確信し、その兆候を Schlesinger は彼に係わる Hinstorff 出版に見る。また出版社『朝』の原稿審査係 Joachim Walther を経ての Volker Braun の万一の参加への要請と Braun の定言的な拒否、Walther の落胆と Schlesing-

er のそれへの評価が述べられている。何故なら Braun は目下「党から砲火を浴び」、彼が参加すれば「彼は砲火を我々全てに向けたのみであろうから。」(37) と興味深い事が書かれている。

次に Stade 個人の情報が書かれている。此の12月中旬より下旬にかけての彼の行動が逐一日を追って記録されており、彼が意気消沈した気分にあると述べられ、その理由は多面的であるが、第一にはプロジェクトの進展状況に係わっているとあり、このプロジェクトが本来の意図でなお実施可能と彼はもはや信じていないが、彼は依然として「精神的不自由の表現としての検閲に対し」(38) 何かを企てなければならぬと言う立場にあると最後に報告されている。

### (X)

1976年最初の報告は宛先も報告者の名も記載されず、『Bettina Wegner/Klaus Schlesinger 勢力からの情報に関して』とタイトルがあり、『K. Schlesinger の誕生祝に76年1月9日ほぼ22時45分頃参加して』とのサブタイトルが付いている。

先ずそこに参加した作家、女優、医者、法律家、原稿審査係等の名と未知の人物の特徴が挙げられ、それらのグループ内の親密さが述べられている。それに対し報告者は彼と妻が幾つかの不審の念とは言わぬまでも、強い用心深さで遇されたと書き、Thomas Brasch の初めの攻撃的姿勢と Wegner の説明によるその姿勢の緩和に就いて述べている。

更に客達の幾人かが彼と彼の妻と部分的に集中的な効果のある対話をしたとは言え、二人は最終的には総体的対話の対象からは締め出されたとある。個々の対話は決まり文句を超えなかった事、彼等と対話を全くしなかった法律家の事も触れられている。その日の午後の Schlesinger への Stade 等の電話とその内容、Stade の滞在先 Alt-Rosenthal へ行くように Wegner に要請された Schlesinger の姿勢にも触れた後に、報告者は1月8日の上司との協議内容に関する幾つかの注釈をする。Schlesinger が或る事柄に係わっている事を彼の何時もと違う姿勢から推測し、彼が目立たぬ様に振る舞い、報告者の前では「開放

的」だが、拘束を受けない内容のいわゆる「個人的」テーマを超えない！と述べ、情報を手に入れる協議済みの可能性のどれも現在の時点では目立たぬ形で作用しており、Schlesinger と Wegner に不信感を抱かせる事はありません！と書いている。また両者は仕事と創作の問題に就いては示唆的な話もしなかったとある。

報告者は更に Schlesinger が「自己実現」の彼の観念に近い幾つかのプロジェクトに従事していると語り、そう言う観点から観ると彼の誕生祝に参加した多くの人物はその様なプロジェクト実現のイデオロギー上信頼された者達だと述べるが、既知の人物達がまだ現れていなかったのは興味深いとも述べている。最後に報告者は彼の行動が非常に慎重に行われた事を確信し、「本来本質的でない文章または本来些細な質問すら無心を装って目覚めた不信感を動員し得る！」(39)と自戒している。非常に興味深い報告者の言と言える。

更に興味深く驚くべき事は、Schlesinger が次の日、招待していなかったと報告者に述べた例の法律家は、報告者達の評価によりどの程度可能な情報提供者になり得るか十分に吟味されるべし！と報告受領者のコメントがあることである。

76年1月21日付けの Rei/Ko よりの例の主要部門 XX/7 宛の書簡には『情報アンソロジー『ベルリン物語集』計画阻止の為に』のタイトルがあり、「近い内にこの計画に参加した作家達と彼等の創作に関する対話が行われると決定された。此の対話の枠内で作家達はアンソロジー『ベルリン物語集』への彼等の参加に就いて意見を述べ、彼等の寄稿の原稿を検査に任せる事が達成される筈である。」(40)との文章で始まり、寄稿を短期間評価した後に、此の計画から離れ、寄稿を撤回する様に彼等を促し、内容如何によっては出版社を提供する等の目的で更なる対話が行われるであろうと書かれている。

以下に参加者達と党或いは作家同盟、出版社側との対話の組み合わせが示されている。例えば文化相 Hoffmann と Plenzdorf、作家同盟副会長 Hermann Kant と Uwe Kant、作家同盟第一書記 Gerhard Henniger と Kunert、Kohlhase と Schlesinger 等の興味深い組み合わせでそれぞれの前者には同志の肩書

きがある。Heym, Schlesinger, Stade との議論は、上述の対話の成果があれば行われるとの文で此の報告は終わる。

次に来る報告は1月23日付けで、やはり XX/7 部門宛の Wild 少佐よりのかなり長いもので、『作戦上の情報 Nr88/76』のタイトルに『作戦上の重点「自費出版」』のサブタイトルが付く。IM 《Andrè》の1月11日の報告に基づいている。

日曜日の当日 Schlesinger の住宅で彼と Stade と協力作家兼原稿審査係 Joachim Walther の間で会合が行われ、本質的に二つの事が中心となった。Walther は Stade に出版社《Morgen》の原稿審査係の長 Henniger が Stade と彼の物語集出版上の新しい諸条件に付いて話す文化省の委任を所有していると言う情報を伝えた。その諸条件とは共和国の宮殿建築に就いての物語の内容変更や一学生の期限前退学手続きに就いての物語の除去が最早問題なのではなく、Stade が宮殿建築の物語も除去する時のみ、物語集は出版されると言うものであった。此の情報の後 Stade はすぐに Schlesinger の所から Henniger へ電話をしようとしたが、彼の電話は間違いなく盗聴されるから止める様に Schlesinger が忠告したとある。Stade 自身の物語出版に対する圧力と盗聴に附いての当局の姿勢が伺われる。

Schlesinger と Walther は彼にこの諸条件に「彼等共同の事柄」の為に応じる様に助言するが、彼は最初その助言に打ち解けない姿勢を見せた。その「文学的に」一番成功した二作品のない物語集は文学的な「トルソ」であり、「誰にも読まれない」ので納得出来ないとの見解であった。Stade の見解はそれ以外に、「党の検閲に対する彼等の闘い」の意味でその物語集出版への徹底した要請をするであろうと言うものであった。それに対し Schlesinger、とりわけ Walther は以下の論拠で彼の考えを変えようとした。

アンソロジー『ベルリン物語集』協力作家達は目下戦略上、出版社等への個人的要請は後回しにせねばならない。そうする事によって彼等編集者に個々の作家と時間を消費し、神経を磨り減らす対話をさせ、それは彼等のアンソロジープロジェクトに対する強烈な直向きな更なる工作を妨げる事になろう。今



プロジェクト終了直前、対決ではなく休息を必要とすると言うのである。

第二の論拠は「上部」からアンソロジーの協力作家達へ「圧力をかける事」が試みられ、直接的または間接的に様々な協力作家達が寄稿を撤回する様に要請されているので、個人的要請の強調は作家達の共同体を「爆破する」のに「悪用」される危険があり、今は個人的利害を超えて連帯する事が必要であると言うのである。

第三の論拠は以下の如くである。Schlesinger, Plenzdorf, Walther, Heym の「中心部」に生じた熟慮があり、それは DDR に於ける自立した作家出版社を作る本来の目標は現在の状況では達成出来ず、それを「遠い目標」とし、好機を待つと言う認識である。従って DDR の評判の良い出版社に結びつく「作家刊行会」の創設と言う実現可能な「近い目標」を立てねばならず、その為に他の社会主義国に於ける類似の企画を手本に出来ると言うのであり、此の熟慮を権威のある所へ持ち出す時には、「静かな海」が必要で「イデオロギーの嵐」は必要でないと言うのである。

最後の論拠はソ連共産党第二十五回党大会が目前にあり、「彼等の様な者達に」厳しくなり、「SED 党大会が此の路線に結びつく」事が確実に予期されるのを Stade は考慮すべきである、つまり「無分別にはではなく党の目標路線へ走る」べきであると言うものである。

Stade が此の論拠を受け入れ、出版社《Morgen》のあらゆる出版条件に同意する用意がある事、Walther によって「作家刊行会」の計画に就いて、「彼等の」計画や関心事に関して過去に「余りにも多く洩らされてきたので」誰とも話さないと約束させられた事が此の報告に更に書かれている。続けて Schlesinger が彼にアンソロジー用に集まっている原稿を審査の為に 1 月 20 日迄読むべく Rosenthal に持って行く様に依頼し、彼は多忙を理由に 20 日以降に受け取り、Rerik の自宅で落ち着いて読み、自分のアンソロジーの為にベルリンへ今一度来る 1 月 26 日より 31 日の間に返却すると提案し、Schlesinger と Walther は納得したとあり、此の報告は終わる。

続く記録文書は作家同盟宛の同盟中央幹部後進担当係の Gisela Hübschmann

よりの1月28日の書簡であり、『1976年1月26日の Wolfgang Landgraf との対談』と言うタイトルがある。内容は Landgraf が75年春の前者との対話で彼が著名な作家達が参加する『ベルリン物語集』への協力を要請され、74年に作家活動を開始したばかりの彼が非常に喜び、参加への諸条件を受け入れた事が先ず述べられている。続けて一年後、上述の日付の対話では彼が既にDDR市民の南米への出国申請とそれに対する当局の拒否の物語を書いた事を述べたとある。何故最初よりDDRの出版社と言う考えを排除するアンソロジーに寄稿するのかと問われ、彼は若い未知の作家としてあらゆる機会を利用せざるを得ないと答えている。続いて述べられるのは説得され彼の参加の姿勢が揺らいでゆく過程である。結局彼は寄稿撤回の方向に向かうが、最終的に断る前になおWaltherとKlaus Sommerとの協議を望む。2月8日以降彼はHübschmannに最終的な決断を連絡すると語る。後者は前者の他人の考えに影響を受けやすい性質を報告し、彼を同盟内での集中的対話に引き込む必要性和76年に多くの若い作家達と共に実施されるソ連旅行へ彼を参加させる事を提案する。

上述の事に係わるWild少佐からのXX/7部門宛の1月28日付書簡はかなり長い。やはり『作戦上の情報Nr91/76』のタイトルに『作戦上の重点「自費出版」』のサブタイトルが付き、1月27日IM《Andrè》が重要な情報を提供したいので臨時の会合を電話で申し込んで来たとある。その会合でIMはアンソロジー組織者グループに1月26日午前中からかなり大きな興奮や疑念が渦巻いていると述べ、それはWaltherが午前中出版社《Morgen》の原稿審査部でベルリン作家同盟工場員Fulko Landgraf(注: 此处では一貫してFulkoとなっている。)と行った対話に由来すると述べている。『工場』(Werkstatt)とは作家同盟によって専門的に世話される若い作家達のグループであると説明があり、Schlesingerは14時直後或る電話を受け、1月26日中に『編集部全員』集合の緊急の必要性を理由づけたとある。即座に解決されねばならないからであり、SchlesingerとWaltherは差し当たって前者の住居で、『他の者達』にも即座に了解を取るべきか決断する為、個人的に会合する事に一致したと書かれている。

(注: 此処には前の文書との時間的齟齬が見られる。)

続けて 1948 年生まれの Landgraf を凡そ 23 歳と誤記した上で、此の報告書は彼が度々 Walther の出版社《Morgen》や Klaus Sommer の出版社《Neues Leben》よりの作品の出版を望み、出版社側も関心を示している事実、Walther より彼が前年 9 月(此処も春となっていない。)アンソロジーへの参加を要請され即座に了解し、最近完成し Schlesinger へ提出した事等を記している。また彼が 1 月 26 日早朝 Walther の出版社へ現れ、電話で作家同盟へ報告の為に喚ばれた事を知らせ、アンソロジーの事が問題になるとは思いもしなかったので、事前に Walther に申し出なかった事も書かれている。その作家同盟との対話が Hübschmann と 1 月 22 日または 23 日に実施されたとあるのも前の文書と異なる。

その対話に就いて恰も Stasi に審問されたかの如くであったと言う Landgraf の印象に触れた Walther が Schlesinger に、Hübschmann が Landgraf をアンソロジーより撤退させようと説得した内容を報告した事も記されている。作家同盟が彼の作家としての発展のあらゆる支えを止めるとか、Kunert や de Bruyn 等が寄稿を撤回したとかである。彼が考える時間を要請し、Walther の助言を得ようとした事も書かれている。IM の報告は徹底しており、Walther が Schlesinger にこれは最早「Landgraf の問題」のみではなく、「皆にとっての問題となった」事、更なる「その様な審問が考えられる」ので総合的対策路線を即座に協議しなければならぬと発言したと述べている。その上で Walther は幾つかの理由を挙げ Landgraf が彼の寄稿を撤回しないように説明する。

続いて報告されているのは Walther の報告を受けた Schlesinger の動揺であり、彼は即座に Plenzdorf, Heym との協議を考え、寄稿撤回の報告がある Kunert, de Bruyn 等四人の立場の不明確さや弱腰を俗語的にコメントし、最近の彼への様々な優遇措置を示す働きかけから自分の番が来た意識した。一方 Walther は今まで到着した原稿は全て薬味が効いているが、最も効いているのは Plenzdorf の寄稿で、プロジェクトを「救う」には「爆弾の信管を除去」すべきであり、それは「生け贄の子羊を畜殺する」事であり、Plenzdorf が「処

理出来るだろう」と言う考えを述べた。Schlesingerはその考えには何か問題があるので、Heymに伝えねばならぬと述べ、上述の四人やLandgrafの「撤退」を顧慮するとアンソロジーの文学的価値は強く問題となり、「その為に蜂起する」のは要するに報われるのか熟慮されねばならぬと語る。それにWaltherは「今やおそらく第一にアンソロジーの出版が問題ではなく、なお党の検閲の続行に対し何かを企てる原則のみが問題である状況が来た。」と反論し、平穏を維持する戦術を止め、「我々が党の攻撃に反撃で応え、彼等に簡単にただ我々のプロジェクトを広く公衆の討議に付すよう強いる事、そしてそれを可能な限りなお党大会前にするのが、おそらくよりベストである。」(41)と述べた。

最後に二人はSchlesingerが1月26日中にHeymとのコンタクトを求め、Waltherにその後Heymとの協議の結果を説明する事で一致したと報告に書かれており、その結果に就いてIMは確認出来なかったとある。報告の最後に注解として、此の情報の公式利用に際しては緊急な情報源の危機が生じると記載されている。

## (XI)

次に前例のある作家同盟中央幹部後進担当係のErika Büttnerから同盟宛の1月30日付けの書簡が掲載されており、『1976年1月29日のJürgen Leskienとの対談』とタイトルがある。彼女は彼が11月にアンソロジーへの参加を伝えた後に彼女等の姿勢を述べ、彼の現在の考えを聞く為に此の対談を要請したのである。

先ず彼が1月30日に例えばHeymの物語の様に幾つか「ひどい物語」があるので、十八人の作家達の原稿を彼女に手渡す事、次に彼は参加者達の見解の一致を不可能にし、反対意見を示す為にアンソロジーに参加し続ける考えを述べ、当時のベルリン作家同盟会長G. Görlichと今一度話す事を語る。続いて彼女の論拠が挙げられている。先ず如何にアンソロジー計画に対し振る舞うか、より集中的に考える時期がいま来ている事に彼の注意を向けた事、その計画に対し彼自身が完全な異議を持つ様に対談を導いた事、この計画が第九回党大会

準備の中で、そして第八回党大会以降の文化政策にとって持ち得る政治的影響を示唆した事、作家グループの中で行われた諸決議は遵守されなかったと示唆した事である。

Leskien はまた Heym 及びとりわけ西ドイツのマスメディアによる若い作家達への影響の試みも見ているが、作家同盟の著名な作家達によるかなり大きな影響の様々な可能性も見ていると Büttner は報告し、Leskien が de Bruyn の小説『ブリダンのロバ』(Buridans Esel) の製作をテレビが中止する事を正当ではないと見なし、de Bruyn とテレビになじませてくれる Plenzdorf との良い関係を重視していると述べている。

同じ1月30日付けの Büttner の作家同盟宛書簡にはやはり『1976年1月29日の Helga Schubert との対談』とのタイトルがある。アンソロジーへの彼女の参加に就いて話す為に前者が申し入れたのである。前者の論拠は以下の如くである。彼女は何故参加するのか、アンソロジーの今迄の仕事が文学の為の我々の国家的、社会的施設を避け、排除するのを知っているのかであり、同盟に公に情報を与える決議が護られなかったと彼女に知らせた事である。

Helga Schubert は NDL (新ドイツ文学)関係の仕事で呼び戻され、原稿に就いての依頼は表明出来なかったと Büttner は書き、Schubert の発言を以下の如く記す。

彼女はテーマの設定に関心があり、ベルリン物語集を非常に重要と見なす。作家達がアンソロジーを出す方法が彼女に気に入った。「全体」に関与するからである。彼女は原稿が DDR 出版社に提供されるという前提で参加する。彼女は Aufbau 出版社の責任者 Fritz Voigt 博士より彼の出版社ではないが、Bertelsmann 出版社が関心を抱き、既に知らされていると注意を喚起された。彼女は目下アンソロジーより撤退するつもりはなく、会談が中断されたので、次回の会合を待ちたい。彼女は一連の物語を非常に面白いと見なすが、幾人かの作家達は抽象的、イデオロギー的要請によって DDR の具体的、社会的状況から解放される事により意識的に彼等の「イメージ」を育てていると考える。

最後に彼女との対談の継続を重要とし、アンソロジーに就いてではなく、彼

女が関心を抱く文学的テーマに就いてと書かれている。

三通目の1月30日付けの作家同盟宛書簡は作家同盟第一書記 Gerhard Henniger からの『メモ』で、同日、同志 Gerhard Holtz-Baumert が作家同盟で同志 Erich Köhler と会談したとある。偶然出会った際に後者がアンソロジーに或る物語を提出したと聞いたからである。前者は後者にアンソロジーの編集者達によって実施される構想と方法に対する異議を説明し、その企てに作家達と出版社、更に所轄の国家施設が賭けられ、提出された物語の悪用の危険もある反対派のグループ結成が容易に生じ得ると示唆したと記されている。

後者は75年11月中旬 Schlesinger より参加を呼び掛けられ、彼の見解では良作であり、DDRでの公表に何ら異議のなかった物語を即座に送ったと述べる。Schlesinger についてはそれ以来聞いていないが、Schlesinger は彼に簡略に Plenzdorf が寄稿した物語を語ったのであり、その物語を彼は不可能で粗野と見なしていると書かれている。

Holtz-Baumert は Köhler に寄稿の撤回を勧め、後者は差し当たって自らによる作家グループの実態の確認を望み、それ故に他の参加者の原稿を手に入れる迄待ち、3月に開かれる作家達の次の会合に参加する意志である。自ら事態のイメージを掴み、政治的に酷いグループと確認したら、即座に撤退するつもりであり、DDR以外での公表に同意しない。

二人は此の問題に就いて更に会談する事に同意し、Köhler は Baumert に原稿を手に入れたら連絡すると約束する。前者は改めて Schlesinger から反応がないのに驚きを表明した。

次に掲載されている書簡はまたもや作家同盟宛の Erika Büttner からの物で、『1976年1月27日の Martin Stade との対談』と言う慣例のタイトルで、書簡送付の日付はない。

Stade は明らかにアンソロジー反対の論拠を聞きに来たとあり、何故アンソロジーに就いての討議とその編集に努める作家達自身のイニシアティブを阻むのか、他のアンソロジーへの参加とは彼にとっては誰が参加するか知らず、その物語も知らない事だからと先ず質問する。次に如何なる権利で計画から撤退

させる為に参加する作家達と話をするのか、彼自身に問い合わせるのが可能なのに、陰険な方法であると言い、アンソロジーは DDR 出版社の為に書かれ、彼は DDR の為に書くであろうと語った。

原稿は提出されており、Stade は同盟にそれに就いて公式に伝える事を提案するであろうが、或る出版社を即座に取り入れる様にとの彼女の提案に彼は答えなかったと Büttner は書いている。

次に来るのは Holm 少尉より XX/7 部門宛の 1 月 31 日付けの長文であり、『作戦上の資料「自費出版」の為の情報収集分析』と言うタイトルが付く。1. プロジェクト『ベルリン物語集』成立史。2. 九月会議後の諸活動。3. 導入された特殊化、崩壊化措置に対する反応。と分け、導入された諸措置に対する反応に就いて IM 達は以下の如く報告していると述べ、先ず参加作家達との対談の成果として、アンソロジーへの今後の協力を拒否する de Bruyn, Kunert, R. Schneider, U. Kant という作家達の決断が見られるとある。(42)

更に様々な措置によって一方ではアンソロジーの進行の不確かさと始まった企画への疑いも確認され、それが他方アンソロジーの仕事の強力な陰謀化、並びに新たに到着した原稿編纂の彼等による強力な仕事と結びついたと書かれている。続けて Schlesinger が訪問者や人との接触を避け、原稿に掛かり切り、仕事部屋に籠もり、一間の住居を友人から借りてそれを知人へ口外せぬ様に試みている事、彼自身の作品の出版計画や彼の目下の仕事もあるのに出版社との可能な新しい契約に就いての会談を拒絶している事から、彼がアンソロジーの完成に集中していると報告者は推測している。

続いてかなり大掛かりな陰謀への注目が Walther の挙動とアンソロジー組織者達の更なる措置の取り決めに際しての慎重さに由来する事を述べ、Schlesinger が Stade に盗聴を避ける為に彼の電話を利用せず、電話ボックスから電話をするよう要請した事、Walther が Stade に安全な打電の方法を委任した事、出版社《Der Morgen》の原稿審査係で現在の作家達のアンソロジー出版を準備している Walther を組織者達のグループに引き入れ、アンソロジーへの参加者達を捜そうとした事をその例に挙げる。

次に当局側の成果として既出の Hübschmann と Landgraf の話し合い、Schlesinger が上述の作家達の参加拒否に動揺し Heym に即座に報告し、アンソロジーの出版に悲観的となり、Walther がそれへの反論として今や党への挑戦が必要だと述べた事、Walther がその際に Plenzdorf を犠牲者に利用する事が出来ないか考慮した事が挙げられている。しかしその結果は今の所、判らないと記されている。

続けて Walther, Plenzdorf, Schlesinger, Heym, Stade の「作家出版社」は遠い目標とし、今は一種の「作家刊行会」に目標を限定し、その例を他の社会主義国に求められると言う考えが此処でも触れられ、それによって党を圧倒し、「作家出版社」を組織する課題の為に好機を見出す事が出来ると言う論拠も言及される。導入された特殊化、崩壊化措置に対する反応の報告は未だ仕上げられていないと書かれている。

その後には上述の 1. 2. 3. と分けられたサブタイトルに続く 4. 大ベルリン地区管理部 XX/7 部門の責任領域にある対人物サークル工作の為に更なる諸措置、と言うタイトルが来る。そこでは先ず作戦上の工作を継続しながら個人々啓蒙の必要な措置を三月半ば迄終了し、同時にアンソロジーの作家達に対する特殊化、崩壊化プロセスが達成される様に IM の動員が強化されるとあり、その為に個々の課題に於ける IM への以下の様な基礎的指導が実施されると続く。de Bruyn, Hansdieter Schubert, Helga Schubert, Elke Erb に対し、アンソロジー組織者への不信感を植え付ける措置が例として挙げられる。その例として Hansdieter 以外の三人にはアンソロジーの政治的動機を明確にし、誤った関係への彼等の作品の徹底的利用を指摘し、前者に対しては組織者達との固い結びつきとアンソロジーの目的との思想的一致を考慮した措置を取る事を此の文書は挙げる。

更にアンソロジー計画の政治的イデオロギー的観点よりも、その展望のなさを全面に押したてよと述べ、Schlesinger への影響力の接点として、彼の作品に対する DDR 体育スポーツ連盟の幾人かの役員の方々の姿勢への彼自身の不満を利用すべしとある。またアンソロジーの計画された目的設定の枠内に於ける



我々の社会的生活の各現象への彼の批判は DDR の社会的発展の根本的諸現象への批判と見られ、利益よりも損害をもたらすと言う事が彼との仕事に於いて明瞭にされるべしとある。その彼との関係開始の具体的きっかけにアンソロジー継続の目下の停滞と二三の著名な作家の撤退を利用せよと述べる。

続けて Schlesinger には能力のある IM を宛て、崩壊化措置への彼の反応に就いて報告させ、同時にアンソロジーの目的設定の継続に関する新しい理念に就いて情報を得させよと述べ、他の作家達に対する崩壊化措置の成果を徹底して利用せよと書かれている。

Walther の場合はアンソロジー参加の度合い、動機、目的設定を説明すべしとあり、74/75 年の戦術的工作の継続を保証する諸措置を執り、一方の Walther, Schlesinger 及び Stade, 他方の Plenzdorf, Heym 間の意見の相違を利用せよと指示する。更に人物グループへの工作の IM の名が挙げられている。この文書の最後には「現在に至る戦術上の諸結果の分析的総括に基礎を置く措置諸計画の改訂は、IM 動員用に此処に明示されている基礎的指導具体化の為に IM への個々の指令に於いて実施されねばならぬ。」(43) と書かれている。

## (XII)

76 年 2 月付けの最初の文書は 3 日の Martin Stade が作家同盟の例の Erika Büttner に宛てた抗議を込めた書簡である。1 月 27 日の彼女との上述の対談を引き合いに出し、アンソロジーに就いて以下の事を伝えると述べる。首唱者は三人でほぼ二年前に理念が浮かび、本来の仕事は一年半前に始まり、公開され作家達に情報が与えられ、出版社にもその時点で知らせたと言う周知の事実を書いている。それ故に秘密保持の非難は理由が無く、悪意があると述べ、アンソロジーでは作家全員が編集者で全ての寄稿を知り、その構成に就いて決定すると言う出版社で恒例の手順に沿っており、それ故に作家達が文学に就いて採決すると決め付けるのはナンセンスであると述べている。

更に党员である彼がその様なアンソロジーに協力すべきでないし、その様な事を組織すべきでないとの非難は論理を欠くし、正に党员こそが新しい道と方

法を見出し、我々の文学を国際的に尊重される地位にもたらし、作家達の間  
の関係を発展させ、文学に就いての討論を活気づける義務があり、アンソロジー  
はその一つ的手段であると書いている。

続けて、最近数週間に文化省、出版社、作家同盟の側からアンソロジーに対  
して本格的攻撃が実施されていると彼は確定せざるを得ず、役割分担によるア  
ンソロジー妨害の計画が明らかに存在すると言う見解に至ったと述べ、同盟は  
参加者達はその寄稿を撤回するように影響を与える課題を引き受けたと記して  
いる。彼女自身がその努力に参加しているとし、とりわけ劣劣な手段が行われ  
ている事に触れる。

次に何故先ずアンソロジー組織者である彼等三人と話そうとしなかったのか  
問ひかけ、臆病なのか、不信の念なのか、彼等三人が既に討議が全く出来ない  
側に立っていると言う感情或いは憶測の知識なのか？ と書いている。またそ  
の様な思考は彼にとっては恐ろしくて侮辱的で今まで彼に示されたあらゆる不  
信感の権化であると語り、その様な不信感を正当化するものは彼のそれ迄の著  
作から読み取れる筈が無いと考え、読み取れるのは彼等の社会が前進するのを  
妨げる一定の状況と展開に対する不安のみであると述べている。

彼はまた文学を促進する課題を担う同盟はその逆の事をし、東では一定の作  
家達が社会に敵対していると西側で証明しようとしているメディアや人物達の  
水車に水を注ぎ、デッチ上げた素材を彼等に提供していると厳しい非難をする。  
この様な関連の中で彼の気を鬱がせるのは若い作家達に発表の機会がない事  
であると彼は記し、同盟にも出版社にも文学の出版を正に妨げる一種の保守的  
思考に当て嵌まる何かがあると述べる。それにはそれ相応の感情の爆発と不信感  
と憎しみが両者にあるのだらうと彼は書き、近い将来それが根本的に変わると  
彼は見ていない。

その様な多くの例を引用出来るがと断った後で彼は Geld Neumann 一人の  
例に限定する。この若い男は文学研究所より除籍され、長年惨めさと体面を汚  
された条件の下で生活を送り、誰にも気遣われず、あらゆる希望を失ったが、  
友人達が説得して彼は再び書き、三物語よりなる本を作成したが、今年の初め

Hinstorff 出版社より断られるのである。Stade は傷付きやすい彼の才能を評価し、再び全てが崩壊し、あらゆる希望と展望が崩壊した状況を想像せよと語り、彼はその信念を曲げずにどうしたら良いのか問いかける。悪い事態は才能あるその様な人々が孤独にされ、何処かの屋根裏部屋で空腹に悩み、人がそれに就いて聞かず、或る才能が駄目になったのを知らない事だと Stade は鋭く指摘をする。

彼はアンソロジーの事に戻り、Büttner 等がする事には根が深い不信感がある様に見え、最初から原文を知らずにアンソロジーの背後に否定的意図を推測していると述べる。或いは当初から作家達独自の指導力が望まれず、彼等是不信感で観察され、疑われているのかと問いかける。その上で彼は彼女に彼に対する不信感はスパイと心情を嗅ぎ廻る迄に至っていると伝え、その様な状態は発展した社会主義が示す生き生きとした社会に相応しくないと根本的な問題を提起している。此处で彼は彼等の計画への 25 人の作家達の積極的反応に従い、原稿受領の最終期限を半年延長する提案をした事、それが本の最終的編集により良い可能性を与えると述べ、文化省、出版社、同盟は彼等の計画への見解を吟味する機会を持ち、作家達は撤退するか、企画に残るか決断するより多くの時間と機会を持つと当局に対する皮肉とも取れる発言をしている。

最後に Schlesinger もその見解を文化省に伝えるつもりであると記し、彼女に理解と不信感を抱かぬ事、及びその他の点で良き協力を求め、この書簡を閉じる。

続いて同盟書記 Henniger 宛の Schlesinger の 10 日付け書簡が掲載されている。彼はアンソロジーに参加している事を告げ、同盟の協力者達がアンソロジー協力の作家達と会談を始めた事を様々な方面より聞いていると述べ、その際に、1) アンソロジーが自費出版され、2) アンソロジーが既に西側出版社に提供され、3) アンソロジー首唱者達が或る「演壇」を結成しようとした、と言う同盟側の主張が為されたと書いている。彼はその様な主張が為されたかどうか確信をもって言えないし、此の書簡でこれらの噂を調査するよう要請するつもりも全くないと断った上で、此の書簡はただ予防的な性格を持ち、以下の

事を説明するものであると述べる。

1) 彼等が彼等のプロジェクトを「自費出版」で実現するつもりだとは不条理な主張である事、2) 彼等はアンソロジーを西側出版社に提出しなかったし、その意図もなかった事、3) 演壇と言う概念で何が理解されようとも、アンソロジーの作家達は決定的に様々な芸術的構想を持ち、何らかの「演壇」を形成する意図は全く持たなかったし、アンソロジーの仕事は作家達の間より強い芸術的コミュニケーションに役立ち、DDR 文学にとって一つの利益になる筈である事、を Schlesinger は挙げる。彼の確固たる確信は揺るがない。最後に「私は貴方に貴方がその種の噂を聞いたら、それをエネルギーに否認するようお願いする。」(44) とある。

次にまた XX/7 部門への Wild 少佐からの 2 月 9 日付け『作戦上の情報 Nr.128/76』、サブタイトル『作戦上の重点「自費出版」』が来る。IM 《André》の要請による 2 月 6 日の臨時の会合に基づいている。

2 月 4 日、5 日にアンソロジープロジェクトの重要な仲間の間で更なる活動に就いての会談が度々行われたとし、彼等の名が挙げられている。それ以前の日付に幾人かの協力者で行われた当局の話し合いがその会談の主要なテーマであった。その際に Schlesinger が相当する作家達から直接内容に就いて情報を与えられた事は明らかで、2 月 5 日に彼はそれらの話し合いが行われた事を知らされたと書かれ、話し合いの相手 Plenzdorf、Uwe Kant、de Bruyn、Helga Schubert、Leskien 等の名が記されている。Landgraf と Hübschmann 間の例の会談に就いて彼は既に 1 月 26 日当日 Walther を通して知り、Plenzdorf は文化相との会談に就いて彼に 2 月 4 日の午後遅く報告したとあり、その目的の為に前者は後者の住居に来たが、短い協議のみで二人が目的は判らぬがその住居を去ったと此の報告は詳細である。その上で Schlesinger が 2 月 5 日に Walther 同席の下に行った論評より二人は Stefan の所に居たと推定出来るが、Stefan とは Heym なのか、Schlesinger が親しい Stefan Schnitzler か判らないとあり、当局の情報の徹底に今更ながら驚かされるが、Stefan を確認出来ない当局の戸惑いも感ずる。

次に Schlesinger が5日に上述の重要なメンバーに Landgraf と Leskien を除いて誰もその寄稿を撤去しなかった事、その他の作家のいわゆる撤退は作家達相互を不安定にする為に同盟が意識的に流した噂に過ぎないと報告したと書かれている。(注: 此处には勿論最終的寄稿者との齟齬が見られる。)続いて Plenzdorf が2月4日の Schlesinger との例の短い協議で「文化相に一度きちんと意見を述べた。」と自慢したと記されている。

彼は、党、国家機関及び同盟ですらアンソロジーの協力者への「彼等の行動」で社会主義的デモクラシー、DDR 憲法及びまた第九回党大会用に今まで公開された記録草案に反対していると文化相を非難し、「断固として」彼の寄稿も、アンソロジー出版準備の仕事への協力も撤回しないと文化相に説明したと自称したとある。

続いて上述の重要メンバーは一致して以下の見解を擁護したと記されている。つまり、「合憲的民主的諸権利の認識と言う彼等の例は同調者を得る恐れがあると言う理由で、例の話し合い行動でアンソロジーが葬られ得る。」と言う見解である。その見解の代表者として Joachim Walther 挙げられている。更に協力者達を不安定にし、「彼等が再びとつくに克服された文化政策的党路線へ強いられる」事を達成しようと当局はしていると言う見解を Schlesinger がとりわけ代表しているとあり、Hansdieter Schubert は「話し合い行動の中に、芸術に於けるタブーを廃止した第八回党大会の路線が徐々に撤回される証拠を」見たと書かれている。Schlesinger は近い内にまた話し合いに「召還」されると強く推測し、「彼の国家公安省行きが起こる」時、驚かないであろうと述べ、Plenzdorf はその様に「暗く」見る必要はない、何故なら誰も彼等を「違法」と非難出来ないし、まして況や「証明」出来ないからと説明する事で前者を安心させようと試みたと述べられている。ともかくアンソロジーの代表者達の一挙手一投足、一言動迄が調査されているのである。

重要なメンバーの間で多面的会談が行われた際に、如何に「この様な話し合い行動に対処せねばならぬか」に関して投票もあった事、いわゆる「連帯的対策を開始する」事で一致した事が記載され、「投票」の核心は「編集部」とそれ

に最も近い協力者に対する以下の戦術上の行動路線決定であったと、その内容が挙げられている。

それは文化省と同盟に於ける厄介事、文書と口頭による誓願、個人的面談の連鎖からの解放、公の朗読会への彼等の寄稿の使用、刊行の為の西側出版社及び文学雑誌代表者へのアンソロジー原稿提供禁止、西ドイツと西ベルリンの西側ジャーナリスト、文芸学者及び文芸批評家に対するアンソロジープロジェクトに関する情報自制、予期される話し合いへの事柄に即した態度と譲歩の禁止である。

此の行動路線の精神で Schlesinger が文化省の Höpcke 宛てに一通の「苦情の書簡」を起草し始め、Plenzdorf が前者と同調して文化相との話し合いの形体と内容に対する「誓願」を国家評議会議長宛に書くのを意図し、H. Schubert が Schlesinger と Walther より苦情を言う為にベルリン作家同盟を訪ねるように勧められ、Stade は既に開始した口頭による「苦情」を文化省出版総務部(主要官庁)にて継続する筈であると書かれている。アンソロジー代表者達の攻撃開始と言えよう。一方彼等が西ベルリンの文学誌『Litfaß』の誘いを断ったともある。続いて彼等が3月に計画された作家達の協議を4月に変更しようとし、「作家達との話し合いに起因する不安と不安定」の現況では、何ら「個々の寄稿に就いての実りある意見の交換は」起こり得ないと言う見解に立っている事が言及され、「計画された3月開催が公の抗議集會に悪化すると恐れられ」ざるを得ないと言う当局の懸念も述べられるが、それは編集部在意図するところではないとあり、興味深い。

最後に、意図されている誓願と苦情に関して Plenzdorf はどんな場合にも内容上の一律性は起こり得ないだろうし、彼等に相応した活動の間に時間的な距離も顧慮されねばならないであろう、さもなければ「彼等の当然の憤慨に際して一つの協調が」問題になり得ると言う考えに至るであろうと指摘したと書かれている。此の報告の最後にも注解として、公式利用に際して緊急な情報源の危機が生じるとある。

## (XIII)

次の書簡はやはり XX/7 部門宛の Holm 少尉よりの『作戦上の情報 206/76』と言うタイトルに『作戦上の重点「自費出版」』と言うサブタイトルが附く、2月16日付けの報告である。IM《Büchner》が2月11日の会合の際に伝えたもので、de Bruyn はアンソロジーより撤退の噂を否定したが、Kunert の撤退はただ知っていると言われ、彼自身は一部始終を少ししかがわしいと見なすが、アンソロジーの準備の仕事が公に行われたので違法とは思わないと語り、目下多数の作家達の関心が薄れたと認めざるを得ないし、彼自身もアンソロジープロジェクトを計画した枠内で更に推進するのをもはや得策とは見なさないと述べたとある。その様な理由から彼は組織者 Plenzdorf、Schlesinger に事業を放棄させるよう話すと語り、その時期を2月6日に設定したが、それが行われたかどうかは未だ確認してないと IM は伝えている。注解としてやはり、此の情報は情報源の危機の為、公に利用され得ないとある。

次の書簡も同じ部門宛の Pönig 大尉よりの2月23日付け報告で、タイトルは『作戦上の重点「自費出版」の為の覚え書き』とあり、IM《Hermann》が2月18日、政治局候補兼党ベルリン地区指導部第一書記 Konrad Naumann と会談し、その際、後者はアンソロジー組織者三人が共同の書簡を彼に書いてきたと述べている。同志 Naumann の見解によればその書簡は非常に厚かましい挑発的な形式で起草されており、彼は Plenzdorf を仄めかしてあの巻き毛頭達には党に最早場所はない、第九回党大会以降これらの問題は早速解明されねばなるまいと語る。

その内容の詳細な面は IM には判らぬが、Naumann がこれらの言葉を心より話し、その様な一歩を党の闘争力純化と確立の為に唯一正しいと見てると IM は述べている。他の作家達も、例えば Hermann Kant 等三人も、Plenzdorf の様な人々から党は別れる時期であると言う見解を抱いていると Naumann は主張している。

次に掲載されているのは2月26日付けの作家同盟宛て Henniger の覚え書きである。その日 Anna Seghers が Plenzdorf より19日に彼女の住居に届けら

れた同封の『陳述書』を彼に手渡した事、それには Stade、Schlesinger、Plenzdorf の署名入りの短い添え状があり、彼等が彼女に彼等に行われている幾つかの非難と従属措置に就いて報告したいと伝えている事が先ず述べられている。続いて彼女が Plenzdorf を不遜と見なし、『陳述書』には「何か誇大妄想がある」事、彼は才能があるが、非常に自惚れ殉教者になりたがっているの、彼と正規に話し、彼の要件で共和国全体を煩わせる事に同意しないと言う忠告をしたいと述べたとある。更に彼女は彼が訴える正当な動機はないと理解し、陳述書の起草者達は明らかに作家刊行会の方向に行こうとしており、彼女は可能な限り共にするつもりはないと語り、彼女は2月19日の同盟員会議で既に彼に彼の陳述書を理解出来ないし、それを重要とは思えないと言ったと書かれている。

陳述書は先ずアンソロジーの既知の経過を述べ、その目標として1. 参加者達を編集プロセスに統合し彼等の個別化の問題に対処し、2. 朗読会、工場等の作業班、様々な同盟、出版社の様な既知の可能性を超えた作家達の間にある芸術上の問題に就いてコミュニケーションを深め、3. 仕事のプロセスの中で、既知未知の作家達が相互の尊重と一つの共同のプロジェクトで統一して彼等の作品に就いて批判的に発言する事によって、ブルジョワ的情况に由来する伝統的な競争思考の撤廃に到達する事を挙げている。

続いてやはり再三挙げられたベルリンに係わるテーマ、寄稿の集まりと広がり、の現況、全員に送られたテキストに就いての75年9月の討論、プロジェクトが報われていると言うその際の確信と、集中的討議が可能な様に参加者達の輪をそれ程拡大しない事を考慮したアンソロジー拡大の提案が書かれている。更にアンソロジーの量が350頁になり、76年春に詳細なテキスト討議が開始され、その巻がDDRの出版社の一つに提出される事、これが現在の時点迄の状態であると述べている。

次に最近二ヶ月はほぼ全ての参加者達に作家同盟及び出版社の側から、プロジェクトへの協力から作家達を引き離す目的を持ち、その結果若い一人の作家がその寄稿を撤去した話し合いが行われたと述べ、その際にプロジェクトは1.



我々の出版制度の構造を根本から変える筈である、2.「自費出版」で実現される筈である、3.ベルリン作家同盟の党大会アンソロジーへの反プロジェクトとして考えられている、4.それが既に或る西側出版社に提供された事によって恐喝未遂を示している、5.密かに、「所轄の機関の」外側で或る「イデオロギー上の演壇」構築の為に組織されたと、主張されたと述べられている。

以上の項目に対し反論が掲載されている。1.出版構造を根本から変える試みはタイトルの同意、印刷許可及び印刷と言う事象が決して今までの普通の方法と区別されないから問題にならないし、我々は最初から一定の出版社に向かわなかった云々、2.「自費出版」と言う考えはどんな時にも話題とならなかったし、我々の出版制度の構造に於いて自ずと禁止されているからでもある、3.我々のプロジェクトの仕事は党大会アンソロジーの十分一年半前に始まったので、「反プロジェクト」として考えられた事はあり得ない。我々のプロジェクトの作家達が党大会アンソロジーにも参加し、或いは寄稿をしたのでなおさらのこと、4.アンソロジーは公表の為、西側出版社に提供されなかったし、例えそれが誰かによって計画されたとしても、全ての作家の同意を必要とする。全ての作家はその様な計画は一度も話されなかったと証明出来る、5.アンソロジーは決して密かに組織されなかった。我々のプロジェクトに就いて少なくとも二出版社が知っており、それへの招待は郵便で送られ、どの作家も沈黙を義務づけられなかった。逆に別の作家達を協力へ招聘するように要請された。テキストの70パーセントは出版社に既知のものである。

続いて此の陳述書は参加作家達に就いて触れ、ベルリン作家同盟はアンケートによって昨年中頃、プロジェクトに就いて知っていたと指摘している。「イデオロギー上の演壇」と言う非難はどんな根拠も欠いていると述べ、テキストの多様性に言及し、その上、多くの作家は此のプロジェクト以前にお互いに知らなかったし、部分的にはまだ知らない...と書いている。どれ程その非難が彼等に不条理に見え、それ程その非難の責任者の動機を知らなくとも、彼等はそれをともかく真剣に取る、何故ならそれは多分社会主義国家と作家達の間を裂くのに役立つからであると、辛辣な批判も書かれている。

次に作家達は此のプロジェクトをその部分的な「生産組合的」側面と共に進歩的な、個々に生産する作家の間の関係を促進する企画と見ており、芸術に心地よい気風を必要とするその実験的性格を意識し、その気風を彼等は第八回党中央大会以降の文化政策的路線の中に感じ、此のプロジェクトによってその意図が達成していると信じていると書かれている。

またアンソロジー参加者は論争を恐れぬが、彼等の実験は従属や中傷や陰謀から自由な大地の上のみ栄えると知っており、それを出版社、作家同盟、或いは別の社会的制度に逆らって実現するつもりはなかったと記され、彼等はあらゆるこれらの社会的制度の統合的部分と感じているとある。更に作家達が彼等のプロジェクトがあつた非難を正当化すると確信しないにせよ、彼等は既に現在の段階では我々の出版社の一つを協力に引き込む用意があるが、プロジェクトに好都合な社会的温床が最早提供されない場合、彼等は彼等の仕事を進める情況に最早ないと見られるとも書かれている。

作家達はこの間に彼等の計画の進歩的な核が認識され、アンソロジーの仕事が進められる事を望む。署名者は此の陳述書の権限を持つ、と最後に記載されている。

#### (XIV)

76年3月最初の書簡は12日付け、Renateなる人物(Schweizer Benziger 出版社の Renate Nagel と思われる。)より作家同盟第一書記 Gerhard Henniger に宛てられたもので、Plenzdorf の作品『下にも遠くにも』に関する批判的批評である。彼女は1. その作品の作り方は新しくはないと述べ、J. Joyce の『フィネガンズ・ウェイク』、I. Bachmann の『偶然の場所』(Ein Ort für Zufälle)、E. Augustin の『頭、ママ、公衆浴場』(Der Kopf, Mama, das Badehaus)に見られると述べている。彼女は Joyce には殆ど理解し難い意識の流れがあり、それを人間と世界の『不可解』の象徴と見なし、Bachmann にはベルリンを狂った病の都市として理解する試みがあり、それを社会的世界観に於ける女性作家の不安定の象徴と見なし、理解する。また Augustin のタイトルには一人の精

神的に不具な未成年の視覚から見た語り手の見解による世界のグロテスクな歪みの遊びを見ると語り、その意味は、世界は狂っているのが精神的に異常な者のみが真実を言えるのであり、彼が此の世界ではいわば正常な者であると言うのである。とりわけそこに Plenzdorf の陳述への類似性が見られるとあり、狂気の性質、つまりいつも安全な母胎に回帰する病的欲望としてのママと言う叫びは世代への憎悪、父親憎悪であると書いている。

此処で彼女は西ドイツに於ける六十年代ベストセラー作家の一人 Augustin の此の作品に言及し、Plenzdorf への類似性は目をそばだたせると指摘し、後者は何れにせよその様な下らぬ作品を利用したと述べる。続いて此の西の作品に就いて A. Löffler と協議したと書き、2. に入る。

問題は誰の為に Plenzdorf はとてつもなくひどい物を書き、それは如何なる機能を持つのかと述べ、それはほんの少数の消息通に解説されると作者は知っており、一般の読者も文学通もどうする事も出来ないと言語。それはそれ故に明らかに彼に何か特殊な物を求め、期待する者達にのみ期待されており、そこに此の作品の機能もあると彼女は記し、更に此の散文は文学以外の、即ち政治的様な理由から一定の陳述を求め、それ故に解説の「苦悩」を引き受ける者達を刺激する筈であると断言する。

Plenzdorf はそれ故に、我々の国家への批判を何処まで行えるか、その様なコースを進もうとしない者達の機先を制する為に如何なる手段を文学的に投入しなければならないかを実演し試す為に、あの「消息通達」との了解を求めているとも彼女は書いている。

処方箋は西側から来ていると述べ、彼女は次の引用をしている。「狂人は全体主義に対する批判を行う最高の人物であり、精神的エリートと自覚している者達によって理解され、あらゆる独裁的異議に対する盾として役立つ。一人の狂人が話す言葉に対して誰が何を言おうとするか」(Augustin の作品への批評より)(45)。Plenzdorf は何時でも彼の人物の狂気を盾にするであろうと彼女は語り、事実誰もが任意の解釈法を文章切片で支える可能性を見出すであろうし、それによって我々は果てしない論議を強いられ、悪意のある者達は喜んでそ

れを追うであろうと記している。Plenzdorf に対する偏見と不信感に満ちている。3. では Plenzdorf の可能な善意の意図は最早問題になり得ない断定され、彼は狂人を用いて根本的批判に迄突き進み、同時に自己を護っていると書かれている。此处で彼女は事柄のあからさまな陳述を例に挙げる。その例は a) 全体の比喩的意味と b) 幾つかの非常に直接的に表現されているが、明らかにまた全く直接的に思考されている章句に分けられ、それぞれの場合が批判的に論じられる。

a) では、世界は狂っているので狂人は世界の現実、政治を正しく捉える、精神薄弱の子供は此の社会の産物である、と言う作品の内容がページ数指摘の上で批判される。更に相違があると言う事を認めようとしないう学校が精神薄弱を促進し、自己の昇進のみを気にかける父親は子供達の精神に何も与えないと言う世代批判は怪しからぬとされる。作品中の語り手の兄弟と言う政治的人物像も批判され、権力の残虐な道具としての警察官は西側の下らぬ本に常に見られると述べられる。Plenzdorf が精神薄弱は好ましくない家族状況からも来ると言う政治的アリバイを手に入れ、母親が西側に逃げた家族の犠牲者としての子供を挙げているのも批判の対象になる。

b) では、語り手の狂った語りりと正常に描かれている示威運動の雰囲気との対立は下劣であるとされ、狂気が示威運動を全ての内容共々パロディー化していると述べ、武装した権力、労働者の伝統、ソ連邦をその例に挙げる。またモンテジューが悪夢の様に効果を発していると言い、世代への憎悪や少なくとも社会主義諸国の首都の名を覚えていれば軍隊に於ける偉大な経歴が約束される事態の叙述をその例として指摘する。続けて Plenzdorf は指導部と他者との隔たりが、それをより大きくしない展開を阻む原因になっていると言う要請を含む様々な所見を完璧に撒き散らし、その上なお、いわゆる能力社会への悪しき攻撃に至っていると述べ、彼女は具体的にそれらの頁を列挙している。

此の書簡に続くのはまたもや国家公安省 XX/7 部門への 3 月 20 日付け、アンソロジー組織者達とベルリン作家同盟党指導部委員達との協議に関する『情報』である。3 月 19 日予定通り 14 時より 16 時 50 分迄同盟の部屋で開催され、

党指導部の側からは DDR 作家同盟副会長 Hermann Kant、DDR 作家同盟幹部兼ベルリン作家同盟議長 Günter Görlich、作家同盟幹部 Rainer Kerndl、同盟書記 Henniger 及びベルリン作家同盟党書記 Küchler が参加し、アンソロジーの方からは病気の Stade を除き、Schlesinger と Plenzdorf が現れたとある。対談の最初に Görlich が両者に、対談は党と国家指導部及び同盟役員への彼等の書簡で投げかけられた諸問題の解明の為に行われると指摘し、同時に彼等はあからさまに、事実即して彼等の問題を説明するべきであり、事態を軽く扱うのを止める時期であると指摘したとあり、此の要請にも係わらず、Schlesinger は全てを軽く扱うそれ迄の戦術を続けようとしたと此の書簡は述べる。その姿勢に対し Kant がその様な事は止めるべきであると異議を唱え、出席者達を欺けると信ずるべきでないと語り、Schlesinger が DDR に於いて検閲を廃止する時期が来ていると要求した時、彼が Stefan Heym と一緒に 74 年 11 月にベルリン作家同盟員の前で与えた説明に照らして此の事柄全体が見られねばならないと言う事に就いて彼は意識すべきであると Kant は述べたとある。

更に Kant は物語集の企画はともかく明白に出版社の仕事締め出し、最後通告的に或る完成した原稿を発表する事を暗示していると述べ、それは場合によっては資本主義社会で正当かつ必要な、しかし我々社会主義社会ではあらゆる存在基盤を欠く方法であると指摘し、続けてアンソロジー完成の為に彼等によって撰ばれた形式はどうしても一つの高度に政治的な事象として評価されざるを得ず、出席者達からその様に見られると語った事が記載されている。また Kant は彼等が企画の政治的意味を軽視出来ると思うべきでないと発言した事も書かれている。

それに対し、Plenzdorf が出席者達に全ての点で同意はできないが、アンソロジー完成の彼等によって撰ばれた形式に就いての出席者達の見解は理解できると譲歩したとある。一方 Henniger は Plenzdorf と Schlesinger に此の協議ではアンソロジーが DDR では出版不可能な事が問題にされるのではなく、上述の形式とアンソロジーの製作が誤っている事、つまり作家同盟が個々の作家達から始めてその様な計画へ注目させられ、それによって既に二年来、或るア

アンソロジーが作成されていると聞く時、それは正常ではないと言う事に就いて話し、明らかにする事が問われていると指摘したのである。更にアンソロジーに含まれている物語に就いて、例えば Weimar 『Kasse-Turm』 に於いて Plenzdorf が作品『下にも遠くにも』を朗読した場合の様に、既に西側のマスメディアによって引き受けられる事があってはならないと Henniger は主張し、前者は要請されたにも係わらず彼の作品を同盟に提供し、討議に任せる用意がなかったので、この様な方法が既に同盟に対する秘密保持の度合いを表現していると述べ、秘密保持は何故なのかと Schlesinger に問う。

Schlesinger はこの対談でその説明の際に最初は秘密保持を否定しようとしたが、同盟側の途中の質問には、アンソロジーの組織者として彼等はアンソロジーに参加していない人々にその見解の為にアンソロジーを用立てる全権を与えられていないと説明した事によって弁明しようと試み、彼等の「民主的」行動はアンソロジー参加者全員の同意を前提としなければならなかったし、その同意を彼は自由に処理はしなかったと言う内容を含んでいると述べたと書かれている。それに対し Schlesinger と Plenzdorf は Kant より、彼等が一方ではアンソロジーに就いてつまらぬ秘密を作らぬと主張し、他方では此の計画を隠し同盟にアンソロジーまたは個々の物語を用立てるのを拒否したと非難され、その理由を問はれたと言う。Görlich が同時に何処迄此の計画が西側マスメディアや出版社に知られているのか質問し、Schlesinger がそれを断固と否定した後、後者がアメリカ、オハイオの或る大学講師 Zipser 博士にその作品公表を任せた事が指摘され、全く忘れていたと口籠もったとある。この辺りは非常に興味深い。

続けて Kant は Schlesinger の話の腰を折り、どの西側のマスメディアがなおアンソロジーに就いて知っているのか後者は認めるべきだと宣言し、《Stern》誌の編集長 Eva Wind-möller-Höpker も知っていると思像出来るし、此の対談の後に対談またはアンソロジーに就いての指摘を《Stern》誌で読みたくなないと主張し、Schlesinger は最初にその問いを否定した後認め、ただ彼女の問い合わせに応じてアンソロジーに関して知らせたと強調する。

それ故に Kant は此处で Schlesinger がアンソロジーの秘密保持は DDR に対してのみ存在した事を明らかに答えた、異議を唱え、その理由に西のマスメディアに対しては彼の民主的行動様式の確立が保持されていない事を挙げる。それに対し彼は自発的に西側の友人を信頼していると発言し、Plenzdorf は当惑顔をしたと述べられている。

次により根本的問題としてアンソロジーは DDR で出版される事が具体的に話され、現況が組織者の側から報告されている。DDR に於ける出版社との協力の一般的形式で出版される事、原稿は目下 350 頁に達し、名前がまだ挙げられていない更なる作家達が参加する事である。Schlesinger と Plenzdorf は DDR で出版される以前に更なる公表や情報を西側のマスメディアに与えない用意があると宣言し、例の『下にも遠くにも』を同盟に用立てるようにとの Plenzdorf への要請を彼は先ずは改訂中との理由で拒否し、完成後討議に附する用意があると答えたとも書かれている。また 4 月 22 日のベルリン作家同盟次期幹部会で彼がアンソロジー仕上げ問題に就いて知らせる事が確認されたと述べられている。

此の対談の際に於ける Schlesinger の不合法的な姿勢の例が挙げられ、非公式な様々な情報源が、一致して彼と Plenzdorf の間に重要な相違があり、後者は前者の姿勢に非常に困惑し極端に控えめになったと評価し、それでも後者は前者からも計画からも離れる用意はなく、実状の説明に別の形式と論拠を用いたのであろうと評価したと最後に記されている。

なお情報源として IM 《Hermann》と IM 《Martin》の名が最後に挙げられている。

### (XV)

3 月最後の書簡は 27 日付けで例の Wild 少佐より XX/7 部門へ宛てられたもので『作戦上の情報 Nr./76』のタイトルのもと『Klaus, Schlesinger, 作家達』のサブタイトルがあり、3 月 19 日の IM 《Andrè》との会談の報告である。IM は 3 月 10 日に Schlesinger とアンソロジーに就いて後者の家で対談したので

ある。その契機は彼の寄稿を Martin Stade より手に入れたと言う後者からの電話であった。後者は前者 IM に「国家の抵抗が余りにも大きい」のでアンソロジープロジェクトの実現は現在の時点では不可能であり、様々な作家達から届いた寄稿は、おそらくなお DDR の出版社に納める試みを後の次期に今一度企画する為に保持されるであろうと説明し、「編集全委員」は党大会の結果がどのような雰囲気を生むか今や先ず一度待とうと思うと述べた。

革命的な違法な意図を追っていたと言う「国家の非難」に対し自衛する為に編集者等は全参加者の名に於いて、後から全作家達に送達する為にまだ訂正せねばならない「描写」と言う形式で或る見解を起草したとも Schlesinger は述べ、IM に数頁の原文を見せた。

此の原文は最初にアンソロジーとその目的の理念の発生に関する一種の説明を含み、その際、周知の真の目標は政治的に積極的な文言で回りくどく述べられ、その後国家の諸機関や作家同盟や出版社による「言われなき主張」の列挙があり、最後はそれに対する「反論」で終わると報告者は述べている。その描写にはなお短い文書が添えられ、此の原文が党中央委員会の Hager 教授、文化相代理 Höpcke、作家同盟会長 A. Seghers 及びベルリン党指導部の Roland Bauer 博士へ送られると協力者達に通知されている。

描写は Plenzdorf、Schlesinger、Stade によって署名され、添え書きは Schlesinger の署名のみで、3月10日付け、描写のほうには日付はなかったと書かれている。Schlesinger は IM に後に添え書きと描写が今一度後者に届けられると説明し、目前の見本を与えず、それは未だ前述の人々には送付されていないと答えている。更に彼は描写の目的は国家の諸機関や党の考えを変える事を意識せず、根本的には「国家と党の官僚主義」に対する現在の彼等の弱さと無力の告白であると述べ、唯一の意義は DDR の作家の多数が「DDR の文学政策を信頼出来ぬ事」の更なる例を知る点にある、何故ならアンソロジー協力者達は「望むらくは此の描写の内容を自分自身の為と見なさない」であろうからと語ったとある。また差し当たって「編集全委員」は「此の描写への上述の役員達の殆ど期待されない積極的反応が」生じない限りアンソロジーの仕事で



中断するであろうとも語っている。最後に IM 訪問に引き続き Schlesinger は作家 F. Fühmann 訪問を意図していると述べ、彼は後者とパリ旅行の為に話をしてほしいと語り、具体的には言わなかったが、後者は良い友人達をフランスに持っており、彼はパリ滞在中彼等を何らかの方法で利用したいと暗示したとある。

続いてやはり Wild 少佐の XX/7 部門に宛てた 4 月 30 日付け書簡が掲載され、タイトルは『テープよりのコピー——情報源: IMF 《Andrè》 受領者: Wild 少佐』とあり、サブタイトルは『1976 年 4 月 8 日午後の Klaus Schlesinger 訪問に就いての報告』となっている。

Andrè は 4 月 8 日町に出るついでに Schlesinger へ電話し、例の約束された資料を取りに立ち寄っても良いか尋ね、妻の旅行と子供達の世話で時間がないが 14 時頃と言われ、母親らしき中年の女性と子供達がいた後者の住居へ行った。彼等の対話は歓迎すべき気晴らしになり、ともかくほぼ三時間になったと書かれている。最初はアンソロジーへの彼の寄稿が話題になり、後者は Joachim Walther が彼に既に一度言った事を話し、いわゆる「描写」と添え書きのコピー、更に最初の 18 人の寄稿ファイルを渡し、75 年 9 月以降の寄稿は編集全委員によって手を加えていないので含まれていないと述べた。なお彼に渡した書類は後者の個人的見本であり、折を見て返して欲しい、それは全ての作家達に渡されるのではなく、大部分のベルリンの作家達とは個人的に話し合いが行われた、Walther が彼にした様に。本来 Walther は彼にその見本を知らせる筈で、それをきっと Henniger に渡したであろうと Schlesinger は説明を加えている。

Schlesinger、Plenzdorf、Stade は 5 月 1 日前の週に《Der Morgen》出版社主 Tänzler 及び原稿審査係 Henniger と会う約束をしたが、そこで最終的に如何なる「運命をアンソロジーが辿るか」決定される筈であり、後者二人は多分予め文化省出版管理総局で協議をするであろうとも Schlesinger は語った。彼は疲れ果て意気消沈し、「描写」を「破産宣告」と注釈し、最早アンソロジーの実現を信じていず、二人との会談による出版の最終的拒否を予期し、全体的な

アンソロジーのチャンスが潰えたと思なした。それ故に André にその寄稿を事によっては別の出版社へ提供する様に助言し、「Plenzdorf は此の事でまだ幸運を信じているが、私にはしかし、そこではもうどうにもならない事が確かだ。そして私はまたうんざりだ。」(46) と語っている。Schlesinger の止むに止まぬ感情であろう。

続けて Schlesinger は西ドイツ、フランス旅行に就いて語り、決して感激的ではない、むしろ否定的な印象を述べ、人々との接触の可能性も少なかった事、彼の物語『青春の終わりに』の伝説的主人公 Dieter Dröder に会った事を語ったが、西ドイツとフランスの政治的光景への見解は避けたとある。なお André の書簡の日付は4月14日となっている。

次に掲載されている資料も XX/7 部門宛の Wild 少佐の5月17日付け書簡で、やはり『テープよりのコピー——情報源: IMF 《André》』のタイトルで、『Klaus Schlesinger との対談に就いての報告』とのサブタイトルがある。André は4月28日の西ドイツ代表ジャズ興行の際にレストランで更に Schlesinger とアンソロジーの事で対談した。後者は前者に事態の最近の状況に就いて説明する義務を感じ、例の描写に関して彼と Plenzdorf、Stade の三人が Hermann Kant から呼び出され事に言及する。Kant はしかし『描写』の内容には全くと言っていいほど入らず、専ら作家同盟中傷を責め、昨年9月の協議後にも集まった寄稿を含めて全原稿を直ちに同盟に吟味用に提供せねば、彼等の除名もあり得ると脅し、同盟と文化省による吟味後に始めて原稿類が自由にされるかどうか決定され得るし、彼等の「独自の指導権」で同盟規約に抵触したと述べたとある。

従って三人は事態をより以上、切迫させず、協力者達の更なる困難を防ぐ為に「強い抗議」を断念し、それへの「理解」を作家達から得る事を望むと Schlesinger は語っている。

それ故に彼等は Kant に全原稿の見本を提供した事、André に同盟に於ける話し合いの準備を勧め、その作品も政治的危険性を持つ事を Schlesinger が述べているのは興味深い。それとの関連で75年9月以来のアンソロジー寄稿の作

家名が挙げられる。《Der Morgen》出版社との交渉に就いては Kant は異議を唱えず、出版社主 Tänzler に彼等との話し合いに就いて知らせるであろうと述べた。その後、彼等と上記出版社との会談が行われ、出版社主は Kant から警告を受けた事を確認するが、それでも幾つかの寄稿を役立てたいし、変更を必要と思う時には Henniger 共々作家達と話す事を留保したいと述べ、三人はその権利を認めたと書かれている。

「此の様なやり方で今や組織者達の本来の計画は『死んだ』のであろう。今や少なくとも文学的にアンソロジーよりまだ何かが生ずるかは、今や本質的に『同盟、文化省の気分及び Tänzler』次第に掛かっている。」(47)と André は書き、Schlesinger が彼に此の様な事で先駆けを二度としない、腹が立つのみで、十分経験済みだと述べ、次に集中力を Kleist 研究に捧げたいと語った事を記して、報告を閉じる。アンソロジー推進役としての気持が十分に読み取れる。なお André の報告は5月3日となっている。

次の資料は Cottbus の XX/7 部門へ IME 《Heinrich》より5月21日に宛てられたもので、5月14日 Lieback 少尉によって口頭で受け入れられたものである。タイトルは『人物 Schlesinger, Klaus 及びベルリンアンソロジーに関する報告』で、IM が改めてアンソロジーより撤退するよう話しかけられたと報告したと言う文章で始まる。彼はそれに拘ってはいないが更に続けると答えて、友人達よりそっぽを向かれる。その間に彼はアンソロジー参加者の何人かの名前を聞いたとしてそれを列挙するが、既に既知の名前であり、注目すべきは以下の記載である。Christa Wolf (支持の書簡のみ)、Wolfgang (?) Schubert 博士——Aufbau 出版社原稿審査係、Volker Braun (?)。(注: 三人とも参加しなかったのである。)

IM は参加者達を我々の社会に欠くべからざる人物達と考えている事、Schlesinger に全ての原稿を送って欲しい、さもなければ彼はアンソロジーの弁護を何ら出来ないと手紙を書いた事を報告している。それに対し後者は4月30日に出来るだけ早くそうするが、150頁がなおコピーされねばならないと答え、更に軽い人身事故を起こしたと告げ、彼等のアンソロジーへの反対プロパガン

ダに驚いた事等述べている。また Leskien がその物語を引き上げ、作家達の最初の会合が荒れた罵詈雑言に変質し、全てが全く病的事態であるが Leskien は主体的であった事、アンソロジー第一稿には 17 作家が参加し、まだ増える事を Schlesinger は述べたと報告されている。

以後かなりの時を於いて、これまでの多くの書簡と同様ベルリンの XX/7 部門に宛てられた 8 月 11 日付け書簡は Holm 少尉からで、『作戦上の素材「自費出版」への覚え書き』と言うタイトルである。此の書簡は先ず『自費出版』へ加わった人々への作戦上の処理は次の目標を挙げたと述べ、全てのそれ相応の統一行為による彼等への調整された作戦上の処理でそれらが達成されるとし、その内容を以下に記している。

アンソロジーは第 IX 回党大会前には独自の出版社では出版されないし、参加作家達はその計画に距離を置く事、アンソロジーは第 IX 回党大会前には DDR 出版社によって出版されない事、アンソロジーは DDR 以外の出版社へ提供されない事、アンソロジー組織者達には、その仕事を第 IX 回党大会前の文化政策への公の攻撃に利用するのは無駄な事。

次にベルリン XX 部門の側からの処理が暗号による作戦によって行われた事を述べる。つまり、IM や様々な作戦上の手段や方法の動員でアンソロジー組織者達の計画と意図が時期を得て発見され、社会的国家的労力、集中的 IM 動員並びに様々な解体措置導入で『自費出版』への作戦上の処理の目標が達成されたと報告している。その成果として、参加作家達の間で意図と見解の相違が生じた事、DDR 以外での出版に距離が置かれ、計画されたアンソロジーに就いての公の討議も実現しなかった事、原稿の完成が三ヶ月躊躇され 76 年 3 月にやっと完成された事、完成された原稿は公に《Der Morgen》出版社に提供され、出版に関する様々な規定と文化政策上の規範を受ける事を挙げている。

更に作戦上の素材『自費出版』に於ける作戦上の処理との関連で上述の経過の目標設定に相応してやはり人物達への啓蒙と働きかけの面で前進があった事、XX 部門責任者達による人物達への処理は上述の経過に於ける折々の目標設定に相応して実施される事、作戦上の素材『自費出版』に於ける人物達への個別

の処理は中止されると記載され此の報告は終わる。

(XVI)

次に掲載されている書簡は 9 月 2 日付けの国家公安省ベルリン地区当局 XX 部門指導者 Kienberg 少将より、DDR 閣僚評議会と国家公安省 XX 主要部門に宛てられた書簡で、タイトルは『作戦上の重点「自費出版」』である。

先ず作戦上の重点『自費出版』の中心的な政治的——作戦上の処理がその目標を実現し、アンソロジー計画を阻止し、党の政策への妨害的影響を阻止した事によって一時的に終了したと述べ、良く調整された上述の処理とあらゆる統一行為の共同によって党と共に決めた諸措置を実現し、意図した効果を達成する事が可能になったと報告している。続いてアンソロジー計画参加者達の様々な個人的行動様式と党の政策への彼等の基本姿勢並びに他の否定的かつ敵対的勢力への彼等の結合、接触、ルートを着目する事によって、これまでの認識に基づき、更なる作戦上の処理と統制の為の適切な政治的作戦上の諸措置が独特な権限に於いて導入され、実施されると述べている。更に周知の否定的人物達と彼等の結合に対する政治的——作戦上の統制と処理の為の次の諸措置は彼等の万一の更なる敵対的意図に際して実現され得ると記し、アンソロジー参加者達に対する国家公安省上層部の万全な姿勢が見られる。

此の書簡は最後に、目下の所、此の問題の恒常的報告は必要ないとし、更なる敵対的経過に関する新しい重要な認識が生じたら、即座に再び報告すると書いている。

次に Cottbus の XX/7 部門へ IME 《Heinrich》より 11 月 10 日に宛てられた資料で、Lieback 中尉(昇進したのであろう)によって口頭で受け入れられた短い書簡が掲載されている。タイトルは『報告』であり、IM が Hinstorff 出版での作家会議の期間 Schlesinger に会い、後者が手紙を書いたのに何故前者が受け取らなかったのか理解出来ないと後者が語ったとある。IM はアンソロジー問題に就いて尋ね、Schleinger が原稿は《Der Morgen》出版社にあると答えた。前者はそれにより本来の理念——作家達の出版——は挫折したし、『音

楽』はもはや演奏されないと主張したが、後者が音楽はまだ演奏されようと曖昧に主張した。Heym、Plenzdorfとの万一の話し合いに応じて、Schlesingerはそれが有り得るだろうと主張し、さもなければ此の問題性を避けたと答えている。彼は IM を自宅に招いている。

Biermann 事件直前の上述の書簡に続く、『ベルリン物語集』最後の記録文書は翌 77 年 1 月 22 日付けで、やはり Cottbus の XX/7 部門へ IME 《Heinrich》より送られ、Lieback 中尉によって口頭で受け入れられたものである。『人物 Schlesinger, Klaus に関する報告』と言うタイトルである。

IM が Schlesinger に手紙を書き、Biermann 事件全体が判らないと述べ、一方の側に今や Peter Hacks や他の者達、他方に Christa Wolf 等が立っており、今迄の展開を見ると立場の逆転である云々と主張した。Schlesinger は IM の手紙に答え、その到着に長い時間がかかった事を彼の手紙の中で訴え、それが開封されたかどうか検査の為に IM の手紙の封筒を送り返したとある。Schlesinger は IM の手紙の封書が毎回、破損しているのに気付いたのである。彼は手紙でアンソロジーにはもはや携わらないと伝え、そのプロジェクトを放棄したが IM 自ら編集者として働くように提案し、放棄の理由として彼は陰謀、中傷、同盟の役員による反革命的反乱グループ結成非難を挙げたと報告されている。

彼は更にテキストは事件の経過より重要ではないし、彼自身アンソロジーの編集人として仕事をするのに関心はなく、作家達に作品を発表するより多くのチャンスを与える考えに関心があったと手紙で伝えたと書かれている。続けて彼は手紙で事態がもう魅力を失ったし、二年間事態に取り組んだが、何にもならなかったと述べている。様々なテキストは既に何処かで出版され、幾つかはそのままでなかった等々と彼は述べ、今一度その様な事を試みるとしたら、より修正した形で別の時期にと述べたが、彼は全ての参加者に事態の説明の為になお一通の手紙を書く事を告知したと書かれている。

此の資料の最後で、IM がベルリンの人々は彼に不信感を抱いていない事を手紙が彼に証明している、Schlesinger はさもなければ手紙を書いてこなかった

であろう——とりわけこれほど開けっぴろげに、と評価をしている事、それによって彼は確実にこれらの人々により近づく可能性を維持するであろうと書かれている。1 行置いて、資料の保護を !!! 注意せよ !!! とあり、更に Lieback 中尉と署名がある。

此の 77 年 1 月 22 日付け文書で、三人の編集者によるアンソロジー『ベルリン物語集』への 74 年 1 月 20 日付け招待状に始まり、国家公安省の 75 年 3 月 29 日付け情報を経ての三年間に亘る記録文書は終わる。これらを顧みると三人の編集者とアンソロジー参加の作家達の自由な姿勢と国家公安省の監視体制の徹底性と政権党の固陋な姿勢の対比が余りにも鮮やかに見られると言える。

## 注

- 1) Berliner Geschichten » Operativer Schwerpunkt Selbstverlag« Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde Herausgegeben von Ulrich Plenzdorf Klaus Schlesinger Martin Stade.suhrkamp taschenbuch. 1995. S. 7. Z. 3-7.
- 2) ibid. S. 7. Z. 9-11.
- 3) ibid. S. 7. Z. 20-24.
- 4) ibid. S. 8. Z. 1-7.
- 5) ibid. S. 8. Z. 11-16.
- 6) ibid. S. 8. Z. 21-28.
- 7) ibid. S. 8. Z. 29-36.
- 8) ibid. S. 9. Z. 24-30.
- 9) ibid. S. 10. Z. 10-13. Z. 17-19.
- 10) ibid. S. 11. Z. 25-26.
- 11) ibid. S. 12. Z. 1-3.
- 12) ibid. S. 12. Z. 10-11.
- 13) ibid. S. 14. Z. 19-22.
- 14) ibid. S. 14. Z. 33.-S. 15. Z. 10.
- 15) ibid. S. 16. Z. 27-33.
- 16) ibid. S. 17. Z. 29-34.
- 17) ibid. S. 18. Z. 11-15.
- 18) ibid. S. 18. Z. 25-28.
- 19) ibid. S. 19. Z. 1-7.
- 20) ibid. S. 19. Z. 20-24.
- 21) ibid. S. 19. Z. 26-27.
- 22) ibid. S. 215. Z. 13-20.
- 23) ibid. S. 216. Z. 21-28.
- 24) ibid. S. 216. Z. 33.-S. 217. Z. 3.
- 25) ibid. S. 218. Z. 1-6.

- 26) *ibid.* S. 222. Z. 28.-S. 223. Z. 2.
- 27) *ibid.* S. 224. Z. 18-21. Z. 24-30.
- 28) *ibid.* S. 224. Z. 39.-S. 225. Z. 5.
- 29) 《Büchner》は前書きでは女性であるが、此処では男性であり、齟齬があり、また前書きの《Andre》と此処以降の《Andrè》の表記の相違も見られる。同一人物と思われるが。
- 30) *ibid.* S. 234. Z. 14-23.
- 31) *ibid.* S. 240. Z. 26-29.
- 32) *ibid.* S. 243. Z. 13-20. 此処には Volker Braun の作品表記の相違が見られる。
- 33) *ibid.* S. 247. Z. 33-35.
- 34) *ibid.* S. 248. Z. 25-28.
- 35) *ibid.* S. 249. Z. 7-15.
- 36) *ibid.* S. 251. Z. 25-28.
- 37) *ibid.* S. 253. Z. 16-18.
- 38) *ibid.* S. 253. Z. 30-31.
- 39) *ibid.* S. 255. Z. 38-40.
- 40) *ibid.* S. 256. Z. 10-15.
- 41) *ibid.* S. 265. Z. 12-20.
- 42) U. Kant 以外の三人は結局撤退しなかった。
- 43) *ibid.* S. 274. Z. 39.-S. 275. Z. 3.
- 44) *ibid.* S. 279. Z. 29-30.
- 45) *ibid.* S. 290. Z. 37-S. 291. Z. 2.
- 46) *ibid.* S. 301. Z. 20-22.
- 47) *ibid.* S. 303. Z. 27-30.



## „Berliner Geschichten“ und die Staatssicherheit

Osamu SAKAI

1995 wurde als Taschenbuch eine Anthologie von Erzählungen unter dem Titel „Berliner Geschichten“ von Ulrich Plenzdorf, Klaus Schlesinger und Martin Stade bei Suhrkamp herausgegeben. Außer den drei erwähnten Autoren haben zu dieser Anthologie beigetragen: Günter de Bruyn, Fritz Rudolf Fries, Stefan Heym, Günter Kunert, Rolf Schneider u.a., insgesamt 15 Autoren aus der früheren DDR. Die Frage, warum in dieser Zeit Erzählungen von Autoren der ehemaligen DDR erscheinen, beantwortet der Untertitel: „Operativer Schwerpunkt Selbstverlag“. Die ersten beiden Wörter gebrauchte der Staatssicherheitsdienst (Stasi) gerne. Weiter steht dort: „Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde“. Diese Sammlung sollte ursprünglich in den 70er-Jahren, also noch zu DDR-Zeiten herausgegeben werden.

Die Herausgeber schreiben darüber, wann sie auf die Idee einer solchen Anthologie gekommen sind, dass diese Idee in der Zeit nach der letzten Periode der Ulbricht-Herrschaft geboren wurde: „Wann hatten wir das erste Mal darüber gesprochen? Im Herbst 73, als wir zusammen in Wieperdorf waren? Oder Silvester in Alt-Ruppin? Die ersten Einladungen verschickten wir jedenfalls Anfang vierundsiebzig . . .“

Aber schon ab Ende März 1975 hat die Stasi das Projekt der Anthologie und das tägliche Leben der Herausgeber und Beiträger mit Hilfe von IM (Inoffizielle Mitarbeiter) angefangen zu verfolgen und das Projekt verhindern wollen. Obwohl die Herausgeber zu diesem Zeitpunkt (November 1975) ihre Arbeit im Wesentlichen abgeschlossen hatten, verschwand „diese historisch einmalige, so brisante wie literarisch bedeutsame Anthologie in Schubladen“, da es den Fall sofort

„durch differenzierte Maßnahmen . . . zu unterbinden“ galt (S. 2. Z. 10). Aus diesem Grunde sind die „Berliner Geschichten“ 20 Jahre später mit einem erklärenden Vorwort und vor allem mit den Dokumenten der Staatssicherheit erschienen.

In der vorliegenden Abhandlung werden dieses Vorwort und die Dokumente zuerst einmal behandelt, erklärt und analysiert.